認識的モダリティとしての〈疑い〉

――「ダロウカ」と「ノデハナイカ」――

宮崎和人

キーワード：認識的モダリティ，疑い，可能性，ダロウカ，ノデハナイカ

要　旨

「ダロウカ」や「ノデハナイカ」は，聞き手不在発話としても使用可能な疑問形式であり，聞き手に情報を要求すると言うよりも，話し手自身の〈疑い〉を表すことに本質があると考えられる。本稿では，この二形式を〈疑い〉の形式と呼び，これらが認識的モダリティの体系のなかにどのように位置づけられるかについて考察し，次のような結論を得た。〈疑い〉の形式は，命題成立の〈可能性〉が認識されている点で「カモシレナイ」と類似するが，「カモシレナイ」が〈可能性〉そのものを差し出すのに対して，〈疑い〉の形式は，選択候補としての〈可能性〉(「ダロウカ」)，選択された〈可能性〉(「ノデハナイカ」)を取り上げる。また，〈疑い〉の形式に「ダロウ」を加えた三形式の関係について検討すると，「ノデハナイカ」は，「ダロウカ」と「ダロウ」の中間的な性質をもつことが明らかになる。かくして，〈疑い〉の形式は，判断の形成段階という観点から，「カモシレナイ」と「ダロウ」の間に位置づけられる。

1　はじめに

従来の日本語モダリティの研究においては，「ダロウ」や「カモシレナイ」などの形式の意味は，いわゆる「概言」(寺村1984)のヴァリエーションとして記述されるのが一般的である。これらの形式は，話し手の認識が何らかの点で不確かであることを表現するものであるが，疑問文を特徴づける意味要素である〈疑い〉と〈問い掛け〉のうち，〈疑い〉もまた，話し手の認識の不確かさの一種であると言ってよいだろう。こうした話し手の〈疑い〉が前面に出た疑問文の実例としては，次のようなものがある。

(1)　内藤はまだこの部屋に住んでいたのだ。私は安堵と，同時に新たな不安を感じながら，扉をノックした。彼は私を受け入れてくれるだろうか……。だが，返事はなかった。　(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

(2)　もっと別の理由があったのではないか。

吟子はそう思いながらその直前で立ち止っていた。　(渡辺淳一「花埋み」)

これらは，「ダロウカ」「ノデハナイカ」が聞き手不在発話で使用されたものである。

本稿では，「ダロウカ」「ノデハナイカ」を〈疑い〉の形式と呼び，認識的モダリティ（epistemic modality）における〈疑い〉の位置づけについて考察することを目的とする。

なお，本稿で「ダロウカ」「ノデハナイカ」と称する形式は，以下のようなものを指す。まず，「ダロウカ」については，普通体「ダロウカ」の他，丁寧体「デショウカ」や，「誰だろう？」のようにwh疑問文において「カ」が脱落したものを含む。類義形式の「カナ」「カシラ」は，文体的な違いの他，機能的にも幾分違いがあるので，ここでは考察の対象外とする[注1]。また，「ノデハナイカ」については，田野村1988の第2類の「デハナイカ」（推定を表現する）のみが対象となる。念のために断っておくと，

（3）「何が嫌なんだ。相談があるって言うから，こうしてわざわざ出て来たんじゃないか」（石川達三「青春の蹉跌」）

のような「ノデハナイカ」は，第1類の「デハナイカ」（発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり，ある事柄を認識するよう相手に求めたりするもの）が「ノダ」形式をとったものであって，もちろん，対象外である。「ノデハナイカ」は，名詞述語の場合には，「Nナノデハナイカ」となるが，「Nデハナイカ」のような形も，第2類相当の機能を有する限り，「ノデハナイカ」に含める[注2]。また，「ノダ」形式をとった「ノデハナイノカ」や丁寧体「ノデハナイ（ノ）デスカ」「ノデハアリマセンカ」，実際の話し言葉で多く見られる，「ノデハ」の部分が「ンジャ」となったものや，「カ」の脱落したもの（上昇調）なども，「ノデハナイカ」として扱う。

2 〈疑い〉の形式の基本的性質

仁田2000など，「ダロウカ」を〈疑い〉の形式と捉える先行研究は存在するものの，「ノデハナイカ」を明確に〈疑い〉の形式と見做した研究は，ほとんど見当たらないようである[注3]。そこで，「ダロウカ」と「ノデハナイカ」を〈疑い〉の形式として並べて考察するにあたっては，まず，両者に何らかの類似性が認められることを指摘しておく必要がある。その一つは，先に見たように，聞き手不在発話において話し手の内的思考活動を表す用法を共有しているということであるが，その他に，「モシカスルト」「モシカシタラ」「モシカシテ」等の副詞[注4]と共起可能であり（(4)，(5)），命題内容を仮定条件節へ受け継ぐことができる（(6)，(7)）という特徴が，「ダロウカ」と「ノデハナイカ」に共通して認められる。

（4）もしかしたら，この刑事は自分のことを疑っているのだろうか。迫坪は不安になった。（三谷幸喜「古畑任三郎」）

（5）もしかして私は誤ったのではないか……
何気なく起きた疑念が，みるまに吟子の頭の中で輪を作り，拡がり，やがて渦のような大きなうねりとなって返ってくる。（渡辺淳一「花埋み」）

（6）――験者たちは，私に女の霊が憑いているというが，それは宮の生霊だろうか。

ああ，もしそうならどんなに嬉しいか。われながら厭わしいこの身も，尊く思えるというものだ。（田辺聖子「新源氏物語」）

（7） 本当にそんなことがあったのだろうか，おれがひっかかったように，あいつもまた世間のやつらの罠におとされたんじゃないのか。そうだとすると，あんなひどいことをするんじゃあなかった，と栄二は思った。（山本周五郎「さぶ」）

また，「ダロウカ」と「ノデハナイカ」は，話し手自身の認識状態の表示である〈疑い〉の用法の他，次のような〈問い掛け〉の用法をもつ。

（8） 「川ちゃんはその水商売の女と結婚するつもりだったのだろうか？」
「そうじゃないのかな。とにかく夢中だったんだから」
（椎名誠「新橋烏森口青春篇」）

（9） 「あら，お急ぎになるんじゃない？」
「いや，まだ，いいよ」（松本清張「点と線」）

このように，〈問い掛け〉用法を派生させるというのも，〈疑い〉の形式に共通する特徴である。もちろん，〈問い掛け〉用法における二形式の機能には著しい違いがあり，特に，(9)のような「ノデハナイカ」は，従来，〈確認要求〉の表現とされているものであるが，これについても，後述するように，〈疑い〉の形式の〈問い掛け〉的使用という観点から分析することによって，その性質がよく理解できる。

〈疑い〉を認識的モダリティの一タイプと考えるのは，本稿が最初ではない。認識的モダリティの体系について述べたものとしては最も新しい，仁田 2000 では，〈疑い〉を「判定のモダリティ」の下位的タイプとして認識的モダリティの体系のなかに明確に位置づけている。また，安達 1999 は，「ノデハナイカ」が認識的モダリティ形式と言えるかどうかについて慎重に検討した結果，従来考えられている認識的モダリティのいかなる類型にも収まらないとしているが，〈疑い〉が認識的モダリティの一タイプとして存在するとすれば，他の類型に従属しないのは，当然のこととも言えよう。問題は，〈疑い〉という認識的態度をどう定義するかということだが，ここでは，暫定的に，命題成立(命題が真であること)の〈可能性〉について思考を巡らす態度と規定しておきたい。〈疑い〉が認識的モダリティの体系においてどのような位置を占めるかということは，次節以降に述べるように，「カモシレナイ」や「ダロウ」との関係について考察することによって明らかになる。

3 〈疑い〉と〈可能性〉 ——〈疑い〉の形式と「カモシレナイ」——

3.1 〈可能性〉の認識

従来あまり気づかれていないことであるが，〈疑い〉の形式は，認識的モダリティ形式の「カモシレナイ」と，ある側面において類似性をもつ。前節で見た，〈疑い〉の形式の特徴である，「モシカスルト」等との共起，命題内容の仮定条件節への受け継ぎは，その

まま「カモシレナイ」にも同様に成り立つ。

(10) 「たとえば，パパなる人物と未紀の関係ですよ。パパは未紀の母の昔の恋人らしいけれど，ひょっとすると，未紀のほんとの父親かもしれない。もしそうなら，これはみごとな近親相姦ですよ。～」 (倉橋由美子「聖少女」)

疑問形式である〈疑い〉の形式と認識的モダリティ形式である「カモシレナイ」の間にこのような共通性が見られるのは，これらが話し手の認識のあり方として何らかの類似性をもつからである。「カモシレナイ」は，かつては，蓋然性や確信度が低いことを表す形式と捉えられていたが，最近では，この形式の基本的意味を〈可能性〉という概念を用いて説明することが一般的である。そして，(4)～(7)，(10)のような性質の共通性から，〈疑い〉の形式と「カモシレナイ」とは，疑問形式と非疑問形式という対立を超えて，話し手が当該命題を一つの〈可能性〉として認識していることを表すという側面を共有していると言ってよいと思われる。

3.2 〈可能性〉の選択と導入

しかし，疑問形式であるか否かということは，大きな対立点であり，また，〈疑い〉の形式どうしの異なりも小さくない。これらの三形式は，命題内容を〈可能性〉として認識する点で共通しながら，その〈可能性〉をどのように取り上げるかという点で対立していると考えられる。そして，このことを明らかにするには，相矛盾する命題の提示の可否・方法を観察することが有効である[注5]。まず，「アルイハ」でつなぐことによって，相矛盾する命題を同時に提示できるか否かを見る。

(11) 彼は外出しているのかもしれない。あるいは，寝ているのかもしれない。

(12) 彼は外出しているのだろうか。あるいは，寝ているのだろうか。

(13) *彼は外出しているのではないか。あるいは，寝ているのではないか。

例えば，「雨が降る可能性」があると言う場合，その裏には，「雨が降らない可能性」も認めていることになる。〈可能性〉とは，そういうものである。したがって，論理的な〈可能性〉を問題にする限り，同時に他の〈可能性〉に言及することに何ら問題はないはずである。実際，「カモシレナイ」や「ダロウカ」にはそれが可能である((11)，(12))。「ノデハナイカ」にそれができない((13))のは，話し手が主体的に一つの〈可能性〉を選択していることを表すからであると考えられる。

さて，(11)と(12)は，いずれも「アルイハ」で二文がつながれているとは言え，その連接関係は同じではない。まず，

(11') *彼は外出しているのかもしれない。それとも，寝ているのかもしれない。

(12') 彼は外出しているのだろうか。それとも，寝ているのだろうか。

のように，〈選択関係〉を表す「ソレトモ」と置き換えることが可能か否かという違いがある。また，(11)は，

(11") 彼は外出しているのかもしれないし，あるいは，寝ているのかもしれない。

のように，〈共存関係〉を表す「シ」を挿入することが可能である（その方が落ち着きがよいかもしれない）。実際の用例を見ても，命題が相矛盾する複数の文を並べる場合，ほぼ決まって，「カモシレナイ」は「シ」で，「ダロウカ」は「ソレトモ」でつながれる。

(14) 終戦宣言という悪質な茶番を思いついたのは局長かもしれないし，知事かもしれない。（開高健「パニック」）

(15) この男は，本当にこんなに単純なのだろうか，それとも僕を厭がらせるためにわざわざ単純さをよそおっているのだろうか，と僕は考えた。（大江健三郎「他人の足」）

つまり，相矛盾する命題を〈共存関係〉で列挙する「カモシレナイ」は，〈可能性〉の存在そのものを指摘する表現であり，一方，相矛盾する命題を〈共存関係〉でなく〈選択関係〉で列挙する「ダロウカ」は，真偽が問題になる状況で選択候補としての〈可能性〉を取り上げる表現であると考えられる。

真偽が問題になる状況において〈可能性〉を取り上げるという点では，「ノデハナイカ」も「ダロウカ」と同様である。両者の違いは，「ダロウカ」が未選択の〈可能性〉を取り上げるのに対して，「ノデハナイカ」は選択後の〈可能性〉を取り上げるというところにある。一方，「カモシレナイ」は，命題の真偽ではなく，当該文脈での考慮の必要性という観点から，〈可能性〉を導入する表現である。例えば，

(16) 「ちょっと，うちへ寄って行きましょう。留守に，矢須子さんが帰って来るかもしれません。貼紙をして置きましょう」（井伏鱒二「黒い雨」）

という文脈では，「留守に矢須子さんが帰って来る」可能性と「帰って来ない」可能性とが半々だったとしても，前者の方を導入しなければならない。

(16') 「ちょっと，うちへ寄って行きましょう。*留守に，矢須子さんは帰って来ないかもしれません。貼紙をして置きましょう」

事前に考慮しておかなければならないのは，「留守に矢須子さんが帰って来る」可能性だからである。

このように，「カモシレナイ」は，当該文脈で考慮すべき〈可能性〉を導入する形式であり，(14)のように，複数の〈可能性〉が列挙されるのは，当該文脈において考慮すべき〈可能性〉が複数存在したり，あるいは，考慮すべき〈可能性〉を一つに絞り込めないといった場合である。

4 〈疑い〉の形式としての「ダロウカ」と「ノデハナイカ」

4.1 「ダロウカ」が表す〈疑い〉の三タイプ

「ダロウカ」が表す〈疑い〉には，取り上げた〈可能性〉を選択候補として話し手がどのように評価しているかという点に関して，中立型・否定型・肯定型の三つのタイプがあると考えられる。以下，各タイプの用例を挙げる。

まずは，特定の〈可能性〉を優先させることなく，中立的な立場をとるタイプ(中立型)である。(15)のような選択疑問文や，次の例のように，選択疑問文に言い換えることのできる yes-no 疑問文は，このタイプである。

(17) 玉枝を女房にできたら……喜助はそのことを夢にみることがあった。しかし，玉枝はきてくれるだろうか。
喜助の考えでは，それは五分五分の可能性と不可能性をもっていた。
(水上勉「越前竹人形」)

次は，取り上げた〈可能性〉を選択しない方向に傾いているタイプ（否定型）である。このタイプの「ダロウカ」は，しばしば「本当ニ」と共起する。

(18) 原田瑞枝はぼくの言っていたことを果して本当に正しく理解していたのだろうか——ということが，日を追うにしたがって気がかりになった。
(椎名誠「新橋烏森口青春篇」)

三つめは，これと逆に，取り上げた〈可能性〉を選択する方向に傾いているタイプ(肯定型)である。(4)のように，「モシカスルト」等と共起した場合や，次の例のように，「ヤハリ（ヤッパリ)」と共起した「ダロウカ」は，このタイプである。

(19) それなら福岡にしてはどうか。福岡・札幌間もだいたい二時間少々とみてよいから，安田が板付発八時前に打ったとしたら，およそ河西の手に十一時ごろ配達されるという時間は合うのだ。
(それでは，やっぱり福岡から安田は打電したのだろうか？) (松本清張「点と線」)

以上のように，「ダロウカ」の表す〈疑い〉に三つのタイプが認められるのは，この形式が〈可能性〉のなかから一つを選ぼうとしてまだ選び取れていない段階を差し出すからである。これに対して，「ノデハナイカ」は，選択後の〈可能性〉を差し出すことから，このようなタイプの分化は生じない。が，〈可能性〉を選択する方向への傾きを有するということとその〈可能性〉を選択するということとは連続するので，肯定型の「ダロウカ」は，(4')，(19')のように，文脈を崩さずに「ノデハナイカ」に置き換えることが可能である（中立型((17'))・否定型((18'))は，不可能)。

(4') もしかしたら，この刑事は自分のことを疑っているのではないか。
(19') (それでは，やっぱり福岡から安田は打電したのではないか？)
(17') 玉枝を女房にできたら……喜助はそのことを夢にみることがあった。*しかし，玉枝はきてくれるのではないか。
(18') *原田瑞枝はぼくの言っていたことを果して本当に正しく理解していたのではないか。

なお，wh 疑問文は，疑問詞部分に代入しうるすべての要素を選択候補と見做している点で，中立型と言ってよいだろう。よって，「ノデハナイカ」は使用できない。

(20) 「この娘のどこに惹かれているのだろうか」

と，伊木は自らに問うてみた。 （吉行淳之介「樹々は緑か」）

(20') 「*この娘のどこに惹かれているのではないか」

また，次のような否定疑問文の例は，「ナイダロウカ」が複合モダリティ形式を構成し，「対岸に激突する」可能性に対する肯定型の〈疑い〉を表していると考えられる。よって，「ノデハナイカ」に置き換えうる。

(21) 対岸に激突しないだろうか。渡辺の胸に，不吉な予感が甦った。

（吉村昭「戦艦武蔵」）

(21') 対岸に激突するのではないか。

4.2 〈疑い〉の形式の情報提供機能

このような「ダロウカ」と「ノデハナイカ」の違いは，対話における情報提供機能の違いに反映する。ある文が情報提供機能を有しているか否かということは，情報要求文(いわゆる質問文)に対する応答として成立するか否かということによって確認できる。例えば，次の例から，「カナ」の文は，wh 疑問文に対して，不確かながら一定の情報提供を行うことが可能であることが分かる。

(22) 「先生，死後どれくらい経過していますか？」

捜査係長がきいた。彼は小さな髭をたくわえていた。

「帰ってよく見なければ分らんが，まず十時間内外かな」（松本清張「点と線」）

これは，「ダロウカ」「ノデハナイカ」でも可能である。

(22') 「先生，死後どれくらい経過していますか？」

「帰ってよく見なければ分らんが，まず十時間内外｛だろうか/じゃないか｝」

次の例は，yes-no 疑問文に対して，思考動詞「思う」で不確かな情報提供を行ったものであるが，ここでは，「ダロウカ」は使用できない。

(23) 「佐山さんは，『小雪』に行ったことはないのですか？」

三原はきいた。

「ないと思いますね。～」 （松本清張「点と線」）

(23') 「佐山さんは，『小雪』に行ったことはないのですか？」

「ない｛*でしょうか/んじゃないですか｝。～」

(22')と(23')において「ダロウカ」の容認性に差が出るのは，選択候補としての〈可能性〉の提示が情報伝達として有効であるか否かということに起因していると考えられる。つまり，yes-no 疑問文を発している(23')の質問者にとっても，「佐山さんは，『小雪』に行ったことはない」という可能性はすでに選択候補の一つなのであって，改めて選択候補を提示する形で応答しても，情報的価値はないに等しい。それに対して，wh 疑問文である(22')の質問者にとっては，「死後十時間ほど経過している」という可能性があらかじめ選択候補として想定されているわけではなく，したがって，選択候補を提示する形での応答であっても，ある程度有効な情報を提供したことになる。一方，もはや候補でな

く，選択された〈可能性〉を提示する「ノデハナイカ」は，wh 疑問文はもちろんのこと，yes-no 疑問文に対しても，情報的価値のある応答となる。

4.3 〈疑い〉の形式の連続的使用

〈疑い〉の二形式は，連続的に用いられることがある。一つは，すでに挙げた(7)や次の例のように，独話的文脈において，一人の話し手が思考の流れに沿って二形式を「ダロウカ」→「ノデハナイカ」の順に使用する場合である。

(24) むしろ，「彼」が今自分と同じ建物の中にいるのだ，すぐ近くにいるのだという思いで尚さら落ちつかず，さらに，「彼」は今日学校に来ているのだろうか，昨夜遅くまで自分と一緒にいたせいで遅刻でもしているのではないか，などと思い，「彼」がいる筈の教室の前まで様子を見に行ったりした。

（筒井康隆「エディプスの恋人」）

(7)は，否定型「ダロウカ」→「ノデハナイカ」，(24)は，中立型「ダロウカ」→「ノデハナイカ」というパターンであるが，いずれの例も，二つの〈疑い〉の文がただ並立しているのではなく，まず，「ダロウカ」の文が問題を提起し，続いて，「ノデハナイカ」の文がそれについて考えうることを一つの仮説として提示する，という構成になっている。そして，これが思考の流れに沿ったものであることは，両者を入れ換えることができないということから確認できる。

(24') *～「彼」は今日学校に来ているのではないか，昨夜遅くまで自分と一緒にいたせいで遅刻でもしているのだろうか，などと思い，～

「ダロウカ」と「ノデハナイカ」がこのように連続して使用されて思考の流れを形成することも，両者が〈可能性〉の選択過程を表し分けていることを物語っているだろう。そして，同様の現象は，対話的文脈においても観察できる。

(25) 「いいよな，給料が二倍だなんてな……」
種一が熱っぽく言った。
「どんな仕事なんだろう？」
「今と同じようなもんじゃないの」
「そうかな」
「そんなもんだよ」

（椎名誠「新橋烏森口青春篇」）

この例では，「ダロウカ」による問題提起と「ノデハナイカ」による仮説提示が二人の話者によって分担されている。こうしたケースでも，二形式の順序が重要であり，両者を入れ換えると，まともな対話を構成しない。

(26) A：彼はまだ独身だろうか？
B：ああ，そうじゃないか。

(27) A：彼はまだ独身じゃないか？
B：*ああ，そうだろうか。

興味深いのは，(27)のBの発話から同意の応答詞「ああ」を除けば，応答として成立するということである。

(27') A：彼はまだ独身じゃないか？

B：そうだろうか。

この応答は，相手の見解に不同意である，あるいは，積極的に賛同できない，という態度の表明になっている。これは，「ノデハナイカ」によって相手が選択して提示した〈可能性〉を，「ダロウカ」によって選択候補の段階に引き戻すことになるからであると説明できる（(25)の「そうかな」にも同様の機能があり，「ダロウカ」に置き換えうる)。

4.4 〈疑い〉の形式の〈問い掛け〉的使用

〈疑い〉の形式である「ダロウカ」と「ノデハナイカ」は，話し手だけでなく，聞き手も直接知りえないような事柄についての〈問い掛け〉に使用できる。

(28) 「これは伝説上の生きものかな？　それとも実際に存在しているものなのだろうか？」と私は娘に訊ねてみた。

「さあ，どうかしら」と娘は言ってかがみこみ，～

（村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」）

(29) 「～うちの梧桐の枝に，鳩が巣を作ってるそうよ」

「へえ，ずいぶん落ちつかない所に作ったもんだね。あれは伝書鳩の野生化したもんじゃないか」

「さあ，もう雌が卵抱いて坐ってるんですって。何日ぐらいで孵るのかしら」

（曽野綾子「太郎物語　高校編」）

こうした疑問文には，話し手の〈疑い〉を聞き手に差し向けることによって，聞き手にも，それについて考えることを要求するという，間接的な〈問い掛け性〉が認められる。ただし，聞き手から引き出そうとしているのが，情報ではなく，意見であることから，典型的な〈情報要求の問い掛け〉から区別して，〈意見要求の問い掛け〉とでも呼ぶのが適当であろう。

「ダロウカ」と「ノデハナイカ」の〈問い掛け〉用法における相違は，〈情報要求の問い掛け〉としての使用のされ方に明確に現れる。

(30) 「ご主人はいらっしゃいますでしょうか？」　（赤川次郎「女社長に乾杯！」）

(31) 「お忙しいんじゃない？」

「いや，僕は大体役立たずなので暇なんです！」（赤川次郎「女社長に乾杯！」）

いずれも，聞き手が直接知っていることを尋ねる〈情報要求の問い掛け〉であるが，情報要求文としての機能は，著しく異なる。(31)には，話し手の見込みを伝えてその妥当性を聞き手に確かめる〈確認要求〉の働きが認められるのに対して，(30)は，話し手の見込みを含んでいるわけではなく，通常の〈情報要求〉である，

(30') 「ご主人はいらっしゃいますか？」

をさらに丁寧化したものにすぎない（したがって，こうした用法は，丁寧体（「デショウカ」）にしかない）。

このように，〈情報要求の問い掛け〉としての使用のされ方という点で，「ダロウカ」が〈丁寧な情報要求〉になり，「ノデハナイカ」が〈確認要求〉になるということも，両者の〈疑い〉の形式としての性質の相違の反映であると考えられる。すなわち，〈可能性〉を選択しかねている状態を聞き手に見せるという手段によって情報要求を間接化＝丁寧化するというのが「ダロウカ」による〈丁寧な情報要求〉であり，話し手が選択した〈可能性〉を提示して選択の妥当性を聞き手に問うというのが「ノデハナイカ」による〈確認要求〉である。[注6]

5 〈疑い〉と〈推量〉 ―― 〈疑い〉の形式と「ダロウ」 ――

5.1 「ダロウ」・「ダロウカ」の対立と「ノデハナイカ」

第3節では，〈疑い〉の形式と認識的モダリティ形式の「カモシレナイ」の関係について検討した。この節では，〈疑い〉の形式と「ダロウ」の関係について検討する。検討にあたって踏まえなければならないのは，「ダロウカ」と「ダロウ」は，疑問・非疑問の形態論的対立を構成するということである。そこで，この対立関係に「ノデハナイカ」がどのように絡んでくるかということが問題になる。

具体的な考察に先立って，見通しを述べておく。「ダロウカ」の文と「ノデハナイカ」の文がこの順に並んで思考の流れを形成することは，すでに見た。この流れのなかに「ダロウ」の文を置くとすると，「ノデハナイカ」の後になるだろう。

(32) 彼は来ているだろうか。来ていないのではないか。たぶん，来ていないだろう。

つまり，「ノデハナイカ」は，「ダロウカ」と「ダロウ」の間に割り込んで，両者の中間的な認識状態を表すという見通しが得られる。

5.2 副詞との共起関係から見た三形式の関係

すでに見たように，「モシカスルト」「モシカシタラ」「モシカシテ」等の〈可能性の想定〉を表す副詞と「ダロウカ」「ノデハナイカ」との共起は自然であるが，「ダロウ」との共起は，不可能か，不自然である。

(4') もしかしたら，この刑事は自分のことを疑っているの｛だろうか/??だろう｝。

(5') もしかして私は誤った｛のではないか/*のだろう｝。……

また，「オソラク」「タブン」「キット」等の〈確信の度合い〉を表す副詞との共起は，「ノデハナイカ」と「ダロウ」には普通に認められるが，「ダロウカ」には起こらない。

(33) おそらく大田氏は現物をみないで秘書に金を払わせるだけではないか。ぼくはそんなことを考えながらタバコをふかし，夫人が席につくのを待った。

（開高健「裸の王様」）

(34) 待て！……なんだ，いまの音は？……聞えなくなった……たぶん，そら耳だっ

たのだろう。 (安部公房「砂の女」)

(34') *たぶん，そら耳だったのだろうか。

このように，「ノデハナイカ」は，〈可能性の想定〉を表す副詞と共起する点で「ダロウカ」と接点をもち，〈確信の度合い〉を表す副詞と共起する点で「ダロウ」と接点をもつ。この事実は，「ノデハナイカ」は，命題内容を〈可能性〉のレベルで取り上げる形式であり，また，その〈可能性〉は現実と対応するという見込みのもとに選択されたものであるということから，選択候補としての〈可能性〉を差し出す「ダロウカ」と，命題内容と現実の対応を〈推し量り〉によって主張する「ダロウ」の中間的な性質をもつということの反映であると考えられる。

5.3 疑問文としての機能から見た三形式の関係

「ダロウカ」と「ノデハナイカ」の疑問形式としての機能の類似と相違については，すでに見た。ここでは，「ダロウ」の〈確認要求〉用法を視野に入れ，改めて，三形式の関係として検討を行う。

すでに述べたように，「ダロウカ」と「ノデハナイカ」は，本質的に話し手の〈疑い〉を表し，いずれも，その〈問い掛け〉的使用として，〈意見要求〉用法を派生させていた。また，「ノデハナイカ」の〈問い掛け〉用法が〈確認要求〉にまで及ぶのに対して，「ダロウカ」はそうでないという違いがあった。「ダロウ」にも，〈問い掛け〉用法が存するものの，〈意見要求〉として使用されることはなく，〈確認要求〉用法しかない。よって，「ノデハナイカ」を「ダロウ」に置き換えることができるのは，〈意見要求〉((29'))ではなく，〈確認要求〉((31'))の場合に限られる。

(29') 「へえ，ずいぶん落ちつかない所に作ったもんだね。あれは伝書鳩の野生化したもん {じゃないか/*だろう}？」

(31') 「お忙しい {んじゃない/んでしょう}？」

このように，疑問文としての機能という点から見ても，「ノデハナイカ」は，〈意見要求〉の用法をもつという点で「ダロウカ」と接点をもち，〈確認要求〉の用法をもつという点で「ダロウ」と接点をもつことになる。

〈意見要求〉用法の「ダロウカ」と「ノデハナイカ」の相違については，選択候補としての〈可能性〉を提示し，選択自体は聞き手に委ねるのが「ダロウカ」であり，話し手が暫定的に選択した〈可能性〉を提示して，その選択が妥当であるか否かについて意見を求めるのが「ノデハナイカ」である，と考えて問題ないであろう。

(29") 「へえ，ずいぶん落ちつかない所に作ったもんだね。あれは伝書鳩の野生化したもん {だろうか/じゃないか}？」

これに対して，〈確認要求〉用法の「ノデハナイカ」と「ダロウ」の相違については，やや込み入った説明が必要である。この二形式は，〈確認要求〉用法を実現させるメカニズムが根本的に異なるからである。

5.4 〈確認要求〉用法における「ノデハナイカ」と「ダロウ」の相違

「ノデハナイカ」の〈疑い〉用法を〈概言〉用法と言い換えるなら，「ノデハナイカ」と「ダロウ」には，〈概言〉と〈確認要求〉の用法が平行的に存することになる。

(33') おそらく大田氏は現物をみないで秘書に金を払わせるだけ {ではないか/だろう}。

(31') 「お忙しい {んじゃない/んでしょう}？」

そして，いずれの形式も，聞き手が直接知りうる事柄であれば，〈確認要求〉になり，聞き手がいないか，あるいは，聞き手が知らない事柄であれば，〈概言〉になる。このように，聞き手の認識のあり方という点では，二用法の実現の仕方に特に違いはない。

(31')のような文脈では，「ノデハナイカ」と「ダロウ」のいずれを使っても，確認要求文としての機能にさほど大きな違いは出ないように思われるが，次のような文脈では，「ダロウ」しか使用できない。[注7]

(35) 「ほら，あすこにあの，ピンク色の洋服を着たお嬢さんと一緒に踊っているでしょう，あれがまアちゃんよ」 (谷崎潤一郎「痴人の愛」)

(35') 「*ほら，あすこにあの，ピンク色の洋服を着たお嬢さんと一緒に踊っているんじゃない？　あれがまアちゃんよ」

この例では，「ホラ」の存在から明らかなように，話し手が確実に認識している事柄を聞き手も認識できるか確認している。つまり，〈確認要求〉の「ダロウ」は，話し手自身の認識が確かであっても使用でき，もはや〈概言〉形式としての性質を完全に失う場合があるのに対して，「ノデハナイカ」は，〈確認要求〉においても話し手の認識が不確かでなければ使用できず，〈概言〉用法との格差が少ないと言えるのである。

さらに，〈確認要求〉用法の「ノデハナイカ」と「ダロウ」の違いとして，次のようなことが観察できる。次のような「ダロウ」の例は，話し手の認識が不確かであるという点では (31')と同様であるが，「ノデハナイカ」に置き換えることができない。

(36) 「山本君，行くでしょ」
三吉さんに言われて，太郎は，行かなきゃなるまいなあ，と心の中で考えていたが，多少おっくうであった。 (曽野綾子「太郎物語　大学編」)

(36') 「*山本君，行くんじゃない？」

このように，聞き手の意志を確認する場合には，「ダロウ」を用いるのが自然であり，「ノデハナイカ」を用いると，聞き手の意志を詮索しているような意味になり，文脈に合わなくなる。また，

(37) 楯夫「作家協会の，ちょっとしたパーティがあるんだ。君を連れて行きたい。いいだろ？」 (野沢尚「結婚前夜」)

(37') 「作家協会の，ちょっとしたパーティがあるんだ。君を連れて行きたい。*いいんじゃない？」

のように，聞き手に許容を求める場合にも，「ダロウ」しか使えない。「ノデハナイカ」を用いると，本来，聞き手に決定権があることに対して話し手が意見しているような意味になり，これも文脈に合っていない。

こうした事実も，〈確認要求〉の「ダロウ」が聞き手の認識を直接確認する形式として概言形式から脱皮をはかっているのに対して，「ノデハナイカ」による〈確認要求〉には，話し手の認識を伝えるという性質が払拭されていないということを窺わせる。そもそも，「ノデハナイカ」の用例には，〈概言〉なのか〈確認要求〉なのか区別のつかないものも少なくない。「ノデハナイカ」自体は，どのような用法においても，話し手が一つの〈可能性〉を有力な仮説として選択したことを伝えているにすぎず，対話において，〈疑い〉(〈不確実情報提供〉)((22'))，〈意見要求〉((29))，〈確認要求〉((31))のいずれの機能を実現させるかということは，文脈や聞き手と当該情報との関係によって決まると考えてよいだろう。そのような意味で，「ノデハナイカ」の〈確認要求〉機能の実現は，多分に語用論的現象であると言えるだろう。

6 おわりに

最後に，本稿で扱った主な形式の振る舞い[注8]を一つの表にまとめ，〈疑い〉の形式の位置づけを確認しておく。

	カモシレナイ	ダロウカ	ノデハナイカ	ダロウ
相矛盾する命題の提示	○ (シ)	○ (ソレトモ)	×	×
モシカスルト等との共起	○	○	○	×
仮定条件節への受け継ぎ	○	○	○	×
疑いの形式としての使用	×	○ (wh 可)	○ (wh 不可)	×
確認要求の形式としての使用	×	×	○	○
オソラク，タブン等との共起	×	×	○	○

「カモシレナイ」は，〈可能性〉そのものを差し出す形式であり，命題内容と現実の対応は問題にしない。一方，「ダロウ」は，命題内容と現実の対応を〈推し量り〉によって主張する形式である。これに対して，〈疑い〉の形式は，命題内容と現実の対応を検討する過程を捉える表現であり，そのような性質が，上の表のごとく，これらに「カモシレナイ」と「ダロウ」の間を埋めるような位置を与えていると考えられる。

〈疑い〉と認識的モダリティの関係を積極的に追究しようとする本稿の姿勢は，〈疑〉の表現は断定保留という意味で推量表現に連なるという阪倉 1960 や，推定と疑問とは，肯定・否定に対する位置資格の概括的な相似があるとする川端 1979，疑問文は「解答案」を提示する文であるとする山口 1983 などに通じるものである。また，新しいところでは，本稿よりもさらに抽象度の高い意味論的なモデルとして，森山 2000 の「選択関係の仮説」がある。本稿もまた，モダリティ研究の新しい方向づけに少しでも貢献できれば幸いである。

注 1　これらについては，カノックワン 1996，三宅 2000 を参照されたい。

注 2　厳密に言えば，この「N デハナイカ」は，肯定疑問形式「N カ」に対する否定疑問の形式であり，形態論的には「N ナノデハナイカ」とは別物であるが，両者の機能差はほとんどない。

注 3　管見では，唯一，「疑う」ということについて考察した藤田 1987 が，「ノデハナイカ」が「〜ト疑ウ」の引用内部に最も頻繁に出てくる文末形式であることを指摘し，これを，「疑う」という思惟の内実を構成するモダリティ形式の典型と考えている。

注 4　この他，「ヒョットスルト」「ヒョットシタラ」「ヒョットシテ」や「アルイハ」がある。なお，「モシカシテ」「ヒョットシテ」は他と性質が異なり，「カモシレナイ」や〈疑い〉の形式だけでなく，情報要求文とも共起する。

注 5　疑問文と推量文の関係を，その文で取り上げている内容に矛盾対立する内容の捉え方の違いとして説明している研究として，森山 1992 がある。

注 6　「ノデハナイカ」と「ダロウカ」を複合した形式として，「ノデハナイダロウカ」（「ノデハナカロウカ」「ノデハアルマイカ」「ノデハナイカナ」「ノデハナイカシラ」も，文法的機能はほぼ同一である）があるが，〈疑い〉の形式としての基本性質は，「ノデハナイカ」と同一であるものの，〈問い掛け〉用法は，〈意見要求の問い掛け〉しかない。

注 7　「ノデハナイカ」ではなく，「デハナイカ」（田野村 1988 の第 1 類）なら，置き換えうる。

注 8　「ダロウ」は，命題内容の仮定条件節への受け継ぎも，相矛盾する命題の提示も，ともに不可能であることを補足しておく。

(6')　験者たちは，私に女の霊が憑いているというが，それは宮の生霊だろう。??ああ，もしそうならどんなに嬉しいか。われながら厭わしいこの身も，尊く思えるというものだ。

(14') *終戦宣言という悪質な茶番を思いついたのは局長だろうし，知事だろう。

(15') *この男は，本当にこんなに単純なのだろう，それとも僕を厭がらせるためにわざわざ単純さをよそおっているのだろう，と僕は考えた。

参考文献

安達太郎 1999『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

藤田保幸 1987「「疑う」ということ――「引用」の視点から――」『日本語学』6-11

カノックワン・ラオハブラナキット 1996「「カナ」「カシラ」に関する考察」『日本語と日本文学』

川端善明 1979『活用の研究II』大修館書店
三宅知宏 1992「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢（日本学篇）』26
――― 2000「疑念表明の表現について――カナ・カシラを中心に――」『鶴見大学紀要』37（第1部 国語・国文学編）
宮崎和人 1993「「～ダロウ」の談話機能について」『国語学』175
――― 1997「「モシカスルト」類について」『岡山大学言語学論叢』5
――― 1998「否定疑問文の述語形態と機能――「(ノ)デハナカッタカ」の位置づけの検討――」『国語学』194
――― 2000「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106
森山卓郎 1992「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101
――― 2000「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
仁田義雄 2000「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
大鹿薫久 1999「叙法小考」『日本文藝研究』50-4
阪倉篤義 1960「文法史について――疑問表現の変遷を一例として――」『国語と国文学』37-10
須賀一好 1995「「かもしれない」の意味と蓋然性」『山形大学紀要（人文科学）』13-2
田野村忠温 1988「否定疑問文小考」『国語学』152
寺村秀夫 1984『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
山口堯二 1983「疑問表現の原理」『国語国文』52-3

付記

本稿の内容は，国立国語研究所日本語教育センター特別研究プロジェクト「言語表現と話者の心的態度に関する対照言語学的研究」研究会（1997年3月8日，国立国語研究所），日本語記述文法研究会（1997年3月15日，大阪大学），第62回日本語学（日本事情）研究会（1997年9月20日，神戸大学），国語学会平成12年度春季大会（2000年5月28日，専修大学）での報告に基づく。

――岡山大学助教授――

（2001年4月5日　受理）